

15. 院内の転倒骨折の予防に向けた取組み

— 転倒・転落 7つの視点：3年間の取組みと成果 —

高知大学 リハビリテーション部

○石田健司, 榎 勇人, 永野靖典, 谷 俊一

【目的】入院患者の転倒・転落は、外傷や骨折を引き起こし、患者のQOL、場合によっては生命に大きな影響を及ぼす。そのため各医療機関において、種々の取組みがなされている。

当院でも、平成18年9月より病院長直属の転倒・転落防止対策チームが作られ、これまで3年間転倒転落による骨折件数の軽減に取り組んできた。

今回その取組みと成果について報告する。

【骨折の現状】当院の転倒による骨折件数は多く、その数は平成18年7件（頭蓋骨1, 肋骨2, 脊椎2, 大腿骨2）、平成19年7件（眼窩底1, 上腕骨2, 橈骨1, 脊椎1, 大腿骨2）、平成20年8件（脊椎1, 大腿骨6, 脛骨1）であった。

【取組み】当院では入院後、看護師による転倒転落アセスメントシート（64項目）が評価され、その点数により転倒転落危険度Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを判断し、その結果に基づき、種々のアセスメントが行われていた。しかし作業が膨大なだけで成果が上がってないと判断し、院内の転倒・転落による骨折件数の抑制につながり、看護業務の省力化になるアセスメントに改善させるべく、取り組んだ。

【対象及び方法】平成18年11月に入院した患者が退院するまでの前向き調査（入院患者652名）として、従来のアセスメントシート64項目を評価し、転倒と関連のあった項目

27項目を抽出した。

次に平成19年11月～2008年1月末まで（3カ月間）の入院患者1956名を追跡調査し、先に抽出していた、アセスメントシート27項目と転倒の有無の関連を調査した。その結果、7項目が検出された。

その7項目とは、

1. 倒したことがある(6ヶ月以内に)
2. 何かにつかまらなるとベッド又は椅子から立ち上がることができない
3. ふらつき・失調性歩行がある
4. 不穏行動がある
5. 向精神薬(睡眠剤・精神安定剤・抗うつ薬)を内服している
6. 浮腫がある
7. 説明しても守らない

であった。

そこでこの7項目の周知徹底を図るべく、各フロア毎に、疾患特異性や6カ月間の転倒場所、転倒原因を配慮した転倒・転落啓発ポスター（年2回（春・秋）のキャンペーン用のポスター）を作成し、転倒予防のアセスメントを依頼（各病棟の特徴を考慮したアセスメントを依頼）した。

また転倒場所として多かったベッド周りの対応として、自動点灯する足許灯の付いた消灯台を導入した。

【結果】当院の転倒転落による骨折件数は、平成18年7件、平成19年7件、平成20年8件であったが、上記の取組み後、平成21

年の骨折件数は2件に有意 ($P=0.034$) に減少した。

【考察】今回、患者教育や各フロア毎の医療スタッフの意識付けや転倒場所として多かったベッド周りの対応等により、転倒転落の基づく骨折件数を減らすことができた可能性があった。しかし患者の転倒転落件数の減少には至っておらず、更なる対応が求められた。